

## 三・一運動における民衆のナショナリズム

——二つの事例から

趙景達

はじめに

- 1 規律化された騒擾——江華の事例
  - 2 起ち上がらない民衆——伊川の事例
- おわりに

はじめに

一般に、三・一運動は非暴力の独立運動であったが、総督府が過酷な弾圧を行った結果、多くの犠牲者を出したと理解されている。隆盛期である四月末までに限ると、万歳運動は全国二三二府郡の内二二府郡で発生し、示威回数二二四回、延べ参加人員一一〇万人であり、その内四二六回は示威衝突している<sup>(1)</sup>。三五パーセントは軍事力が行使されたわけである。当局は犠牲者数を過少に集計することに努め、三月一日には陸軍次官より朝鮮憲兵隊司令官に対して、「事態如斯状況ニ至リシ上ハ断固タル処置ニ出ツルノ外ナキモ」、外国人に「残酷苛察ノ批評ヲ招カサルコト二十分注意」し、「朝鮮ヨリノ通信ハ適当ニ取締方取計ハレ度」との電報が送られた<sup>(2)</sup>。要するに「断固タル処置」=過酷な鎮圧はやむを得ないが、外国からの批判を避けるために適切な情報統制を行えと命じたのである。総督府警務局では朝鮮人の死者五五三人、負傷者一四〇九人としている<sup>(3)</sup>が、あまりに過少な集計である。米国キリスト教会連合協議会の報告には、当局発表の朝鮮人死傷者数は、「実情に比べ全然少ないし、死傷したと公的に知られたものを記録しているにすぎず、暗い村道での見境ない射撃で死傷した人々を含めてはいない」としている<sup>(4)</sup>。当局も、朝鮮人は「死者ハ直ニ之ヲ運搬シ傷者ハ暴動参加ノ罪ヲ恐レテ極力秘匿セントスルヲ以テ実数ヲ知ルコト困難ナルモ最近ニ於ケル調査ノ結果ニ拠レハ約一千五百名ニ達セリ」として、死傷者数が過少であることを認めている<sup>(5)</sup>。一五〇〇人というのものなお過少であり、上海の大韓臨時政府にいた朴殷植は朝鮮国内からの各種の情報に基づいて、死亡者七五〇九名、被傷者一万五九六一名、被囚者四万六九四八名と見

(1) 金鎮鳳『三・一運動史研究』（国学資料院，서울，二〇〇〇年）八九頁。

(2) 姜徳相編『現代史資料 二五——朝鮮（一）三・一運動（一）』（みすず書房，一九六六年）八六～八七頁。

(3) 同上，四七四頁。

(4) 姜徳相編『現代史資料 二六——朝鮮（二）三・一運動（二）』（みすず書房，一九六七年）三九七頁。

(5) 近藤銀一編『万歳騒擾事件1（三・一運動）』（友邦協会，一九六四年）二九頁。

積もっている<sup>(6)</sup>。これは誇大のようにも思われるが、在ハルピンの新聞社ノーオスチジーズニは「在京城韓字新聞通信員」の報じるところに基づき、四月一日までで銃殺・突殺と負傷後死亡を合わせて八三三〇人が犠牲になったとしている<sup>(7)</sup>。朴殷植の記述は、むしろ抑制された数字であったかもしれない。いずれにせよ、多大な犠牲者が出たのは間違いないが、今となっては犠牲者数を確定することはできない。

では、民衆は黙って撃たれたのであろうか。示威衝突のケースが三分の一以上に及んでいるということは、民衆の側も少なからず何らかの対抗暴力を行使したのではないかということを示唆している。当初は平和的な示威であったものが徐々に暴力化していったということは、これまでの研究で明らかである。京城では学生・知識人の指導のほか、首都の武断体制が地方に比べて格段に厳しいという事情もあり、暴力は抑止される傾向にあったが、それでも犠牲者が出るにつれ徐々に暴力化したし、また地方では暴力は決して珍しいことではなかった。憲兵隊司令部と総督府警務総監部の調査では、三月一日～四月一〇日において総示威回数七七六回中、示威隊が暴力に及んだのは二八八回で、その内棍棒、鎌、斧などの凶器の所持が認められたものは六〇回あり、総示威衝突回数中二〇%が確信犯的な暴力抗争をなしたということになる<sup>(8)</sup>。

平和的示威に終始したにせよ暴力化したにせよ、総督府を震撼させた三・一運動は挙族的な民族運動であり、それは近代的なナショナリズムの発露であったかにみえる。「完全独立を争取しようとする独立戦争のような様相も現れた」<sup>(9)</sup>とする評価が出てくる所以である。しかし冷静にみれば、参加者は全人口の六パーセントに満たず、壮年男子に限ってみても一五パーセントほどである<sup>(10)</sup>。また、全国で一九一九年末までに検挙された者の内、五五・六パーセントは農民であり<sup>(11)</sup>、参加強制が多かったということにも留意しなければならない。しかも、万歳運動は祝祭的に行われ、市日に行われることが多く、酒に酔って参加する者も続出した。農楽隊や妓生・少年隊が登場し、篝火行進や万歳山呼が行われ、無我夢中に万歳を叫んだ。そして、一般民衆に対してだけでなく、郡守や面長・面職員・区長、巡査・巡査補・憲兵補助員などに対しても万歳を強要する場合が少なくなかった。まことに万歳示威は熱狂的に行われ、それはまさに九年も続いた武断政治の息苦しい閉塞状況に対する熱狂的な抗議であった。それはまた、伝統的な民乱の作法を多分に継承していたが、人々は祝祭的な狂騒の中で朝鮮民族たることを再確認した。こうした万歳運動の政治文化や民衆の心性に着目して、当時の民衆のナショナリズムを始原的ないしは即自的なナショナリズムとしてみなければならぬというのが、これまで筆者が問題提起してきた議論である<sup>(12)</sup>。この議論は端的に言って、上からの民族主義的観点から民族運動・民衆運動をみるのではなく、逆に下からの

(6) 「韓国独立運動之血史」(白巖朴殷植先生全集編纂委員会編『白巖朴殷植全集』동방미디어, 서울, 二〇〇二年) 第二卷, 五五〇頁。

(7) 前掲『現代史資料 二六』六八七頁。

(8) 金正明『朝鮮独立運動Ⅰ——民主主義運動編』(原書房, 一九六七年), 四七八, 五八六頁。

(9) 이정은『3·1 독립운동의 지방시위에 관한 연구』(국학자료원, 서울, 二〇〇〇年) 一四二頁。

(10) 拙稿「『独立万歳』の政治文化と民衆」(『歴史評論』二〇一九年) 参照。

(11) 朝鮮総督府官房庶務部調査課「朝鮮騷擾事件ノ思想及運動」(『朝鮮三・一独立騷擾事件——概況・思想及運動』(巖南堂, 一九六九年) 四四七～四四八頁の職業別逮捕者数の表から計算した。

(12) 拙著『朝鮮民衆運動の展開——士の論理と救済思想』(岩波書店, 二〇〇二年) 第七章, 及び前掲拙稿参照。

民衆運動史的観点から民族運動・民族主義を捉え直そうとするものであり、より広範な民衆の心性に迫ろうとする動機に基礎づけられたものである。

本稿は、年来のこうした議論を事例に即して、より具体的に再検討しようとするものである。徒手空拳の運動と喧伝されてきた三・一運動が、実際にはその三分の一ほどで対抗暴力化しているという事実を直視するなら、暴力化した万歳運動こそを取り上げるべきであるが、そうであるとはいえ、やはり非暴力の事例がまさっている以上、まずもって非暴力の事例をみとく必要がある。しかも、暴力化した事例を扱うのは紙幅が許さない。残念ながら、その事例研究は他日に期することとし、ここでは、基本的には非暴力的に展開された万歳運動についてのみ検討することにする。取り上げるのは、対蹠的な非暴力運動として展開された二つの事例である。一つは大規模な運動でありながら整然と展開された京畿道江華郡の運動であり、もう一つは小規模に終わった江原道伊川郡の運動である。もっぱら使う史料は『韓民族獨立運動史資料集（三・一運動）』（国史編纂委員会、一九九四～一九九六年）に収められている各種尋問記録であるが、本史料の文献注については煩瑣を避けるために、本文中に（○巻「文書名」頁数）として示すことにする。文書名が訊問調書の場合には、原本には書かれていないが、警察・検事・予審などの別を記した。

## 1 規律化された騒擾——江華の事例

江華は島をなしているとはいえ、京城に近い三月一日の万歳運動は比較的早く伝わった。主謀者は吉祥面温水里に住む劉鳳鎮という三四歳の人物で、かつて旧韓国軍の陸軍上等兵を勤めたことがあるキリスト教徒であり、同教の属長という地位にあった。しかし、併合後は金銀細工と理髪業を営む一般の市井人となっていた。そのような彼が京城の万歳運動を耳にしたのは、五、六日頃のこと、店先で客より聞いたとのことである（㉔「劉鳳鎮警察訊問調書」五五五頁）が、これは偽証のようである。劉の訪問を五、六日頃に受けた劉熙哲という人物の供述によれば、次のようである（㉔「劉熙哲警察訊問調書」五二一頁）。

京城学校生黄道文ガ京城ヨリ印刷物ヲ携帯シ帰り之ヲ見ルトキハ佛國巴里ノ講和會議ニ平和主義ヲ爲スコトナリ、朝鮮モ日本ト分離シテ独立スヘキコトナレハ江華モ独立万歳運動ヲ要スルモ、多人数ナラサレハ不可ナレハ吾吾ハ其主謀者トナリ江華市場ニ於テ市日ヲ利用シ、群衆ヲ煽動シ運動ヲナシ度ニ付加入ヲ申来リタレハ私モ賛成シ同意シタ……。

京城にいた江華出身の学生黄道文から京城の様を伝え聞いたことで、劉は江華での万歳運動を計画し、まず同じくキリスト教徒の劉熙哲にその旨を伝えたのである。劉の計画準備は何よりもキリスト教徒のネットワークを活用することであった。八日には牧師の李鎮亨に打ち明け、手分けして教徒の家々を回り、九日、吉稷里の教会堂に教徒ら二〇名ほどを招集した。黄明熙・洪寛五の二人以外は全員がキリスト教徒であり、劉鳳鎮ほか黄道文・黄道成・劉熙哲・趙鍾桓・趙鍾烈・廉成五・李鎮亨・黄富有・張允伯などが主だったメンバーであった。その内学校教師の趙鍾桓は、黄道文と同じく一日の京城万歳運動に参加しており、「江華ニ於テモ黙ツテ居ツテハイケマセン、一回

万歳ヲ唱ヘテ見ヨウ」と熱弁を振るった。すると、張允伯が市日での決行を提起した(㉔「張興煥検事訊問調書」五三二頁)。劉鳳鎮は我が意を得たりであったであろう。しかし、劉が誘った二人の非キリスト教徒は先に帰り、万歳運動に暗黙の異を唱えた。また同日、場所を替えての会議では、京城の学生たちを支援する寄付をしようということになったが、その際劉鳳珍は「我々ハ温キ温突ニ寝テ黙ツテ居ルコトハ出来マセン、応分ノ寄付ヲ為シ国家ノ為ニ働ク彼等ヲ助ケナケレバナリマセン」と学生への連帯と愛国の弁を述べた(㉔「張興煥検事訊問調書(第二回)」五三四頁)。

その後一二日、劉鳳鎮は運動を拡大するために西島面の注文島に出向くが、その前夜、妻に決死の覚悟を告げている。すると妻の曹氏は、「夫ガ死セハ妻モ同様運動シテ死ヲ決スル」ものだと述べたというが、夫婦の同志愛的悲壮感が窺い知れる(㉔「劉鳳鎮警察訊問調書」五五六頁)。「同人一族ハ全部独立運動ニ関係シ妻ノ如キハ婦人ヲ煽動シ十人位ヲ引連レ群衆ニ加ハリ江華邑内ニ至リ盛ニ独立万歳ヲ唱ヘタリ」と言われ、日頃より夫婦間で独立談義なされていたようである<sup>(13)</sup>。ただ、曹氏の尋問調書は散逸によってか残されていない。

劉が注文島の耶蘇教学校で演説をしたのは一六日のことであるが、一二〇名ほどの生徒や教師がそれを聴いている。この学校は、劉が上等兵だった頃注文島に駐在した際、その校名を永生学校と命名し、その後もいろいろと世話をしてきたという因縁があった。彼はそこで「巴里講和会ハ民情ヲ顧ミル処デアルカラ朝鮮ノ民情ヲ顧ミナイコトハナイ」として「大ニ独立万歳ヲ唱ヘテ騒擾セナケレバナリマセン」と演説し、決死隊を募った。最後には上着を開いて「江華郡吉祥面温水里何番地劉鳳鎮独立決死隊」と書いた下着を見せ、天国での再会を誓っている。しかし決死隊に応じた者は、五、六名の男女生徒が手を挙げたようであったが、実際には崔公涉という一八歳の教師だけであった(㉔「崔公涉警察訊問調書」四九三～四九四頁)。

その間江華邑では、一二～一三日に普通学校で同盟休校があったり、普通学校女子部で校内万歳運動が起きたりした<sup>(14)</sup>。しかし、この学生運動は劉鳳鎮らの運動とは関係ない。劉の不在中、彼の同志たちは着々と万歳運動の計画を実行した。吉祥面の富裕な廉成五や黄富有の自宅などで、黄道文が持ち込んだ文書をもとに、一五日頃から「独立宣言書」「江華人民ニ」「独立歌」などを印刷し、各方面に配布した。そして一六日、劉鳳鎮不在のまま廉成五宅にて会議が持たれたが、牧師の李鎮亨が、人数が過少であるとして決行の不可を唱え、二名の者が賛同した。だが、彼らが帰宅した後、血気盛んな一九歳の黄允実が、「男子ガ一度事ヲ始メカ、リテ中止スルコトハ不可ナリ。(中略)自分ハ一人デモ江華市場ヘ行キテ万歳ヲ唱ヘル積リダカラ之ニ反対スル者アレバ其者カラ先ニ打殺ス」と述べたことによって、一八日に江華邑内で万歳示威を行うことが決した(㉔「黄允実検事尋問調書」五三九頁)。最高指導者の劉鳳鎮が不在中に万歳運動の日が決まるというのは不可思議にみえるが、市日は五日に一回なので、一八日を逃すと、二三日まで待たなければならない。劉が注文島に発つ前に一八日の決行は、すでに大体は決まっていたものと思われる。すでにビラ配布を行っており、計画期間が長引けば露見の可能性も高まるので、劉が戻れるかどうかにかかわ

(13) 한국사데이터베이스『大正八年 騒擾事件ニ関スル道長官報告綴』七冊ノ内六「地方民心ノ傾向等ノ件報告(松永武吉)：朝鮮總督府 内秘補 889 秘第 405 號」<http://db.history.go.kr/item/level.do?itemId=pro> (最終閲覧 2019 年 3 月 18 日)。

(14) 前掲『朝鮮独立運動 I』, 三七五頁。



らず、一八日に決行するのが最善だと考えられたのであろう。そして、翌一七日には黄允実・劉熙哲・張明淳・黃日男・張東元・曹尚文の若者六名が集まり、劉鳳鎮の求めに応じて決死隊に入るとを誓った（㉔「黃日男検事訊問調書」五四一頁）。

こうして一八日を迎えた。その日の模様は劉の供述（前掲「劉鳳鎮警察訊問調書」及び「劉鳳鎮警察訊問調書（第二回）」「劉鳳鎮検事訊問調書」）に詳しいが、それによると以下の通りである。

万歳示威決行の時刻は午後一時三〇分である。劉鳳鎮は注文島に行く途中で、すでにある人物から決行日時を聞き、永生学校の演説でもそのことを話したという。一八日の決行は承知していたものの、午後一時三〇分の開始というのは、この時初めて知ったようである。しかし運悪く、風の吹き具合が悪くて出航が遅れ、劉が決死隊員となった崔公涉とともに注文島を出たのは一七日の夜で、帰宅したのは一八日の午前一〇時を過ぎていた。妻と養子夫婦に最後の別れを、と思い立ち寄ったのだが、事は急を要する。養子には馬への鞍の設置を命じ、養子の嫁には「今回独立運動ヲ為セバ生キテ帰ラナイカモ知レサレハ忍耐シテ仲良ク暮ラセ」と、決死の覚悟と別れの言葉を送り、白馬にまたがって江華邑の市場に急行した。

到着した時刻は、ちょうど一時三〇分であった。すると、昼食をかき込んでいる最中に万歳の歓声が始まりだした。そこで、劉は秩序がないのを察し、すぐに郡庁通りにある大鐘を撞いて同志を呼び集めようとしたところ、朝鮮人と日本人の巡査に二度捕まった。しかし、もはや巡査らにはなすすべなく、逮捕することができなかった。群衆は熱狂的であった。逆に二〇名ほどの群衆は、別のある巡査補に対して「汝モ朝鮮人ナレハ万歳ヲ唱ヘヨ」と迫り、巡査補が拒否して逃げると、打殺するとして追い回した。ついにその巡査補は抜剣したのだが、劉はかえって命が危ういとみて間に入り、暴行はさせぬから発砲もすると言って仲裁した。こうしてようやく大鐘にたどり着いて打ち鳴らすと、三〇名の同志が集まった。彼らは決死隊と、彼らが率いていた者たちであろう。江華邑に入城する際に劉は、おそらくは彼が来るのを今か今かと待ち受けていた黄允実と張東元に出会い、決死隊が自身を含めて七名であることを確認している。崔公涉を含めると八名だが、当局は二〇名ほどいるとみていた（㉔「犯罪事実意見書」五二四頁）。

劉の運動方針は、郡庁・客舎・孔子廟と順次示威して行くというものであり、三〇名の同志にそのことを指示すると、ただちに各自が群衆にそのことを伝えた。そして、劉が先導となり、まず郡庁に行き「人民ノ代表者」たるべき郡守に万歳を強請した。群衆の中には「殺セ殺ル」等悪口ヲ申ス者もいたが、劉は自ら総代となってそれらの暴言・暴行を制止し、粘り強く説得した結果、一時間後ついに郡守は万歳を唱えた。その後予定通り客舎→孔子廟と回り、劉は独立演説を行ったが、その時決死隊の三名が逮捕されたという知らせを受ける。そこで、「決死隊ハ前ニ出ヨ」と号令すると、全員が前に出たという。劉は、「運動者ハ全員決死隊ト私ハ思ヒマス」と言い、勇を鼓して万歳を叫んだ者たちへの万感の思いを吐露している。この日の示威参加者は実に一万人であった。劉は群衆を率いてすぐに警察署に行き、三名釈放の交渉を行ったが、群衆中には酒に酔った者や暴行しようとする者もいた。劉は何度も「本運動ハ独立運動ナレハ暴行投石死傷等ノナキ様群衆ニ大声注意ヲ加ヘ」、巡査を殺せと叫ぶ者に対してはいちいちそれを叱責してやめさせた。こうして、またも粘り強い交渉の結果、三名は釈放となり、群衆は市場に引き返した。武断警察が民衆側の要求を受け入れ、逮捕者を釈放するなど奇跡的なことである。その際劉は再び演説を行ったが、その内容

は次のようなものである。

朝鮮ハ従来民智低カリシモ現在ハ独立シ得ル程度トナリ京城其他ニテ此ノ運動盛ンナリ。殊ニ李太王殿下ノ死ハ病死ニアラス毒殺ナリトノ風説アリ、之レ天ノ命スル処ニシテ独立ノ氣運熟シタレハ盛ンニ運動ヲ要ス。

また、崔公涉によれば、劉はこの時次のようにも言っている（前掲「崔公涉警察訊問調書」四九三頁）。

李承晩ガ巴里講和会議ニ朝鮮独立運動中デアリ講和会議デハ獨立ガ鮮人ノ希望ナルヤ否ヤヲ見ルカラ我我ハ獨立万歳ヲ唱ヘナケレバナリマセン。伊藤博文ヲ暗殺セント思ヒテ公ノ保護巡查又小使ニナラント考ヘタルモ目的ヲ達スルコト能ハザリシガ、自分ヨリ豪イモノガ居リテ私ノ希望ヲ達スルコトガ出来マシタ。

劉はかつて、安重根的な志士的精神を持った人物であった。三・一運動の勃発の消息を聞き、その心呼び覚ましたのであるが、今はバリ講和会議に期待をかける非暴力独立論者となっていた。劉は万歳示威を執拗に展開すべく、翌日にも計画し、演説の最後に自らが住む温水里への集合を呼びかけた。しかし、彼の後に演説した旅館の主人が、仁川や京城から多数の警官や軍隊が来るから解散すべきだと言うと、夜一時頃、喧噪の一日がようやく幕を閉じ、全員解散となった。後味の悪い幕切れである。

それゆえ、劉は仕方なく摩尼山に逃れることになる。五月中頃に逮捕されたが、逃走の最中にも独立の夢をあきらめてはいなかった。逃走したのは責任逃れなどではなく、独立運動の継続を期してのことである。総督や警察署長、そして親日派巨頭の李完用などに朝鮮の独立を訴える手紙を送ろうとする一方、クリスチャンらしく神に祈りを捧げた。彼の手帳には、「独立主創者決死代表劉鳳鎮 朝鮮独立旗 京畿道江華郡吉祥面温水里五ノ一番地」という文字が記されていたが、これは独立の暁に作ろうとした旗の印であった。また、独立後には、「巡撫使」となって「各地ヲ巡視シ良民ヲ表彰スル」つもりであったという。「独立主創者決死代表」という自称や「巡撫使」志願などには、色濃いリーダー意識と英雄意識が感じられる。

以上が江華万歳運動の顛末である。運動参加者は、一時は二万人にまでふくれあがった<sup>(15)</sup>。キリスト教徒のネットワークが多くの人々の動員を可能にしたのだと思われるが、死傷者が出ることなく平和裏に終わったのは、何よりも劉鳳鎮の決死の卓越した指導力のたまものである。旧韓国軍で培われたであろう規律精神によって、彼は縦横に暴力化を阻止するのに尽くした。彼は財力ある者ではないが、その徳望は相当なものであった。彼を中心とする同志愛的な糾合が強固な指導部を作り上げ、若者たちも彼を信頼して決死隊に入った。甲午農民戦争でもそうであるが、徳望ある者が指導者となり、逸脱する暴力を抑止した。やがて戦争状態が長期化するにつれて秩序維持が難しく

(15) 同上、三九五頁。

なり、最高指導者の全疎準は苦悩を深めていくのだが、指導者が責任を持って民衆の指導に乗り出したとき、秩序は維持される<sup>(16)</sup>。江華万歳運動では、運動当初にわずか二名の軽傷者があってだけで、他に死傷者が出なかったために官憲の事後処置も比較的穏健であり、自首する者に対しては「単ニ始末書ヲ徴シ放還セルニヨリ近来自首者続続トシテ出テ一度警察ノ門ヲ潜リタル者ハ安心シテ業務ニ親ムノ有様」であったという<sup>(17)</sup>。また当局は、逮捕者は自身のなしたことについては自白するも、共謀者については語らないとし、それゆえ「彼等ノ結束ハ誠ニ強固ナリト云ハサルヘカラス」と感心している<sup>(18)</sup>。

しかし江華では、その後大群衆が起ち上がることはもうなかった。翌日にも万歳運動を、という劉の提案はむなしく退けられ、その日温水里では「不穏な挙」がありはしたが、軍隊が派遣され何事も起こらなかった<sup>(19)</sup>。もちろん、その余波はあった。①二一～二四日に喬洞では、連日一〇〇人ほどの民衆が駐在所や郡衙前に人々が押しかけて万歳を叫び、三五名が逮捕された<sup>(20)</sup>。②二七日には二〇〇〇名が事務所を襲い、発砲によって負傷者が一名出たという記録がある<sup>(21)</sup>。③四月一日には数カ所で各一〇〇人ほどの篝火万歳示威があった<sup>(22)</sup>。④八～一一日にも連日、所を替えて一五カ所以上の場所で三〇～一〇〇人ほどによる篝火万歳示威があった<sup>(23)</sup>。⑤一三日にも五〇名ほどの運動があった<sup>(24)</sup>。だが、②を除けば人的動員はさしたるものではなく、しかもこの運動は江華島のどこで起きたのかを含め、その詳細は不明であり、誤報に基づく記録である可能性がある<sup>(25)</sup>。①はやや執拗で、逮捕者も少なからず出ているが、動員数は少ない。⑤も小規模で、詳細さえ分からない。③と④の篝火万歳示威は連鎖的で執拗のようにみえるが、頑強な抵抗をみせたのは四月八日の冷井里の民衆だけである。銃剣により二名の負傷者が出ているが、他の篝火万歳示威はみな官憲に解散を命じられると、すぐに解散している。この示威運動は山呼とセットであり、民乱の伝統的な作法を継承し、篝火を持って山に登り、あらん限りの声で万歳を声がかかるまで何回も叫ぶというものだが、老人や子どもを連れだって行われるところもある。戸ごとに人数を一、二名割り当て村落的

(16) 拙著『異端の民衆反乱——東学と甲午農民戦争』（岩波書店、一九九八年）参照。

(17) 前掲〈地方民心ノ傾向等ノ件報告〉。

(18) 同上。

(19) 前掲『朝鮮独立運動Ⅰ』四九六頁。前掲『現代史資料 二五』一三五頁。

(20) 同上、四一九、四二〇、四二八頁。

(21) 同上、四九六頁。前掲『現代史資料 二五』一六一頁。

(22) 同上、五一七頁。

(23) 同上、五八八、六〇五、六〇七、六一八頁。『現代史資料 二五』三三四頁。

(24) 同上、七四八頁。

(25) 管見の限りではこの記録は、一九一九年四月四日付の「陸軍次官より侍従武官長への通牒」にある三月二日から三日までの「不穏の行動」一覧表に簡単に記されているだけである。二〇〇〇名規模の運動であるにもかかわらず、朝鮮軍司令官・朝鮮総督・総督府警務部の報告類にはいずれも記載がない。また、京畿道長官松永武吉がその都度朝鮮総督府政務総監宛てに送っている「騷擾ニ關スル件報告」（前掲『大正八年 騷擾事件ニ関スル道長官報告綴』七冊ノ内六）の三月二八日付にも、二七日に起きた高陽・廣州・坡州の騷擾は詳しく報告されているのに、江華については言及がない。ちなみに前日二七日付（同、七冊ノ内二）の「騷擾ニ關スル件報告」には二六日に起きた高陽・長湍・廣州・水原の騷擾が報告されている。さらに、前掲「地方民心ノ傾向等ノ件報告」などの三・一運動収束期の民心調査報告にも三月一八日の運動について触れているばかりである。

に行うことが多く、義務的、温和的であることを特徴とする<sup>(26)</sup>。独立運動への参加が当為とみなされる中で、他村からの侮蔑を免れるために行うのだが、基本的には官憲との直接対決を避けたいという意図によっている。

以上のように江華の人々は、三月一九日以降はその大半が万歳を叫ぶことはなかった。二万人の大群衆は、そのほとんどが一日しか万歳を叫ばなかったということである。民衆のエネルギーは、たった一日の熱狂のうちに消失されてしまったかのようなのである。そこには、地方における万歳運動の祝祭性がよく示されている。警官や軍隊との本格的な闘争は、本来生活者として日常を生きる民衆には容易になせる業ではなかった。

熱狂から冷めて生活者に回帰していくのは指導部にあっても変わらず、後悔する者が続出している。江華万歳運動の訊問調書は散逸したものが多くあり、逃亡者も少なくなく、指導部全員の調書は残っていない。そうした中で、九日の最初の会議に集まった者の一人である黄道成は、三五歳の農民だが、「今ニ考ヘマスト無意味ナ馬鹿ナコトヲ為シマシタ」と後悔の弁を述べている(㉔「黄道成警察訊問調書」五四七頁)。また、同じくその会議に出席した趙鍾烈は、その場で熱弁を振るった趙鍾桓の兄で伝道師を務める四二歳の農民だが、「今ニ考ヘテ見レハ無意味ナ妄想デアリマス」とやはり後悔の弁を述べている(㉕「趙鍾烈警察訊問調書」五四九頁)。一六日の会議で「反対スル者アレバ其者カラ先ニ打殺ス」と啖呵を切った黄允実などは、「今ヨリ考ヘテ見ルト自分ナガラ狂人ニナツテ居ツタト思ヒマス。今後ハ前非ヲ悔ヒテ改心シマス」と反省しきりである(㉖「黄允実訊問調書(第二回)」五四一頁)。注文島永生学校で唯一決死隊員となった若き教師崔公涉も、劉鳳鎮の「誠意ニ賛成シテ手ヲ挙ケタ丈」で決死隊員になったわけではないと言い訳している(㉗「崔公涉検事訊問調書」五〇二頁)。さらに、九日の会議を途中退席した非キリスト教徒の黄明熙などは、「兎ニ角同所ニ集リタルモノガ子供及無学ノモノ計リテスカラ何ンナコトガ出来ルヤト思ヒ不賛成」であった(㉘「洪明熙警察訊問調書」五五二頁)と劉鳳鎮らを軽侮する発言さえしている。さすがに劉鳳鎮は「機会サヘアレハ致シマス」として独立運動の継続を吐露したが、供述が残っている他の者にはこうした意志の堅固さはみられない。安重根を尊敬する劉は英雄主義的であり、まさに一八日はそのように八面六臂の奮闘をしたし、証言の口吻も英雄然としている。しかし、ほとんどの者は独立できるかもしれないという楽観的希望の中で祝祭的に行動したのである。そして、そうであるがゆえに熱狂から冷めて生活者に戻ったとき、身を犠牲にする独立運動は到底なしうるものではなかった。独立願望は胸の内に秘めておくのが、過酷な暴力に支配される植民地民衆の心性管理というものであり、そのナショナリズムは、実は臆病な心性と隣り合っていた。

## 2 起ち上がらない民衆——伊川の事例

こうした民衆の臆病な心性を端的に垣間見せた万歳運動が、江原道伊川郡の事例である。これは、上からの民族主義的観点からは容易に読み解けない民衆の民族運動のあり方をよく示している。

(26) 「朝鮮憲兵隊長報告書——大正八年朝鮮騒擾事件状況」(市川正明編『三・一独立運動』3, 原書房, 一九八四年) 二三九頁。



事の起こりは四月四日午後三時頃、楽壤面支石里の米市場での騒擾である。二名の者が各自太極旗を打ち振りながら市場に入り、独立万歳を高唱し、みなに同参を求めた。その様子は「殆ど狂的」でおよそ三〇〇〇人もいた市場を歩いて行ったが、同参者はわずかに三名であった。すぐに憲兵に五名とも逮捕されたが、その間五分ほどのことであった。太極旗を打ち振った二名は駐在所に至るまで万歳を連呼することをやめなかった(㉞「逮捕告発調書」四三〇頁)が、三・一運動史上最小の運動とすることができる。その主謀者の二名は元天道教徒の李斗栄(三〇歳)と現天道教徒の金赫根(五三歳)である。即日五名に対する憲兵の尋問が行われたが、李斗栄は「各地テ独立万歳ヲ唱ヘテ居ルコトヲ知り、自分モ其ノ気が起リ」、あくまでも自分一人の考えで行ったことであり、他村の住人ではあるが天道教徒の金赫根に話を持ちかけて事に及んだと主張した(㉞「李斗栄憲兵訊問調書」四三八頁)。また、三名の同参者は李斗栄と同村の者たちであったが、いずれも李に執拗に勧誘され、何か問題となった場合は、その責任は「自分が引受ケル」などと言われたことで同参したということが明らかとなった(㉞「李昌源憲兵尋問調書」四三三頁)。

李斗栄の覚悟は確かなものであるが、誘いを受けた金赫根もまたそうであった。金は天道教祖孫秉熙の入獄を聞き、自分も「先生ト同ク独立万歳ヲ唱ヘテ監獄ヘ入ルノ決心ヲシタ」が、同村の者を万歳運動に誘っても「気違ヒ」だと言われてなすすべがなかった。仕方なく一人でもやろうと思っていたところ、李斗栄に出会い、ともに決行することになったのだという(㉞「金赫根憲兵訊問調書」四三六頁)。しかし、事態はそう単純ではないことがまもなくして判明する。

楽壤面では、同日深夜一〇時頃から翌五日午前二時頃まで慌ただしい空気となった。天道教徒の金炳河(三四歳)・金応済(四八歳)・金利淳(二六歳)・李呂鍾(五四歳)の四名が、内洛里と支上里で熟睡中の村人たちを起こし、「里民拳ゲテ朝鮮独立万歳ヲ唱フケレハ参加スヘシ。若シ服セサル者ハ殺傷又ハ家屋ニ放火スヘシ」と参加強制を行ったのである。実際、金炳河は棍棒によってそれに応じなかった村人一名の面部を殴打し、打撲傷を負わせている。その結果一〇〇名ほどが集まり、午前五時頃支石市場に入って万歳を高唱した(㉞「意見書」四五八頁)。その際には金炳河は、他の三名の指導者共々非暴力を説き、「物ヲ破壊等サシテハナラス」と命じた(㉞「李炳奎憲兵尋問調書」四四二頁)。自身らの行動が独立運動という大義によるものであることを自覚していたからである。その後支下里駐在所に押し寄せようとしたが、数度にわたって解散を命じられると、楽壤面事務所に転じて面長を引き出そうとした。この時には金炳河は、「暴行ヲ加ヘテモ(面長に)万歳ヲ呼ハセネハナラス」と言っており(㉞「金応済憲兵訊問調書」四四九頁)、末端の親日権力に対しては頑なである。しかし、再三の解散命令と三発の威嚇射撃を受けて、ようやく解散した。なお、朝鮮軍参謀部の状況報告には、この騒擾で死者五名と負傷者二名が出たことになっている<sup>(27)</sup>が、これは何かの間違いであろう。憲兵の意見書や公判始末書、訊問調書などをみてもどこにも死傷者については触れられていない。警務総監部・憲兵隊司令部が作成した「騒擾事件経過概覧表」には発砲一件と記録されているのみである<sup>(28)</sup>。

実は四日昼の第一次運動と五日未明の第二次運動は連動したもので、第二次運動こそが本番であ

(27) 前掲『朝鮮独立運動Ⅰ』五三五頁。

(28) 同上、七三八頁

り、即逮捕の可能性が高い第一次運動には後者の金炳河・金応済らの指導者たちはあえて参加しなかった。李斗栄たちが振った太極旗は、金応済が金利淳に作らせたものを李斗栄らに渡し、第一次運動を起こさせたのである（前掲「意見書」四五七～四五八頁）。李斗栄たちは自分たちだけの判断で事を起こしたと証言したが、それは後に続く運動を秘匿しようとしたものであったことが明らかである。

この伊川万歳運動の全体設計者は金炳河であり、金応済がそれに次ぐ。計画は金応済宅で行われている。金炳河は平康郡西面在住の者だが、新溪郡よりやって来た人物であった。金は三月一日の独立宣言について「新聞紙上ニ於テ見受ケ承知シ」、「朝鮮独立万歳ヲ高唱セバ朝鮮ガ独立ノ気運ニ達スルトノコトヲ聞キ居タノデ金応済ニ朝鮮独立万歳ト高唱、示威運動ヲ為スベク相談セント思ヒ立寄ツタ」（⑳「公判始末書（第二回）」四七九頁）として、伊川での万歳運動の計画は単に自身が発案者で、金応済がその協力者であるかのように証言している。しかしこれは、天道教組織との関係を秘匿しようとしてなされた偽証だと思われる。金炳河も金応済も天道教組織との関係については語っておらず、金応済に至っては「中央總部其ノ他カラ手紙モ人モ参リマセヌ」と明確に否定している（前掲「金応済憲兵訊問調書」四四八頁）が、金炳河自身が天道教組織の意を受けた人物であった可能性がある。実は、金炳河の兄金炳烈は天道教の巡回教師である（同上）。また、金炳河が住んでいる平康の天道教区には、安商憲という天道教人がいわゆる民族代表の一人李鍾一の意を受け、二月二八日にいち早く独立宣言書七〇〇枚を選び込んでいた<sup>(29)</sup>。金がいち早く独立宣言書を読んでいたのは間違いない。三月一日の段階で民族代表は自首してしまったのだから、上層からの指令があるはずはないが、天道教やキリスト教の地方組織レベルでは自主的な動きがあったのは周知の事実である。金は何らかの組織的使命を受け、伊川に来たものと思われる。彼は、おそらくは各地を回って万歳運動を指導する、いわゆる万歳クン（万歳屋）のような人物であったのであろう。金応済は天道教組織との直接的関係について語っていないが、「韓国独立万歳ヲ始メテラ必ず引立テラルルコトハ承知シテ居タ」とし、あたかも事後天道教本部から独立運動の貢献を認められ、何らかの役職に就く予定になっていたかのような証言をしている（前掲「金応済憲兵訊問調書」四四八頁）。金応済は三・一運動勃発以降、憲兵より何回も「決シテ人民ヲ煽動シタリ騒擾スル様ナコトカアリテハナラヌ」と戒告を受けていたほどの、伊川の有力な天道教人であった（同上）。であればこそ、金炳河は彼を頼りに伊川にやって来たのである。伊川には兄金炳烈とその息子の金利淳も住んでいた。ただ、金炳烈は当時不在であったのか、伊川の万歳運動には加わっていない。

伊川万歳運動は規模としては大きなものではないが、逆にそうであるからこそ、民衆の心性を知る上においてはたいへん興味深い。まず第一次運動についてであるが、三〇〇〇人も市場にいて同参する者が全くいなかったというのは、民衆の傍観者の心性を示唆している。「酒酔フテ居タ人達モアルカラ取押ヘガ後ケレハ大事ヲ起シタカモ知レマセヌ」という目撃証言がある（㉑「證人孔稚観憲兵訊問調書」四三九頁）ように、憲兵への発覚が遅ければ、大きな運動になった可能性があった。しかし、万歳運動が世上を騒がせていることを知りながら、すべての者は傍観者を装った。確かに「此人等ノ為大變市場ハ多ク非常ニ騒キ」はした（同上）が、市場にいた者たちはみな運動に巻

(29) 「安商憲地方法院予審訊問調書」（前掲『三・一独立運動』4）三〇九頁。

き込まれるのを明確に拒否した。江華万歳運動とは全く対蹠的である。指導部の結束力や計画の緻密性、あるいは指導者の徳望や名望などが担保されない場合、人々は容易には万歳を叫ぶことができなかつたということである。李斗栄がかりじて組織した三名の同村者も、責任は李斗栄が取るということで同参したということはすでに述べた。事後、彼らは「今トナリテハ恐レ入りマス。悪イコト、思ヒマス」と言うしかなかつた（㉞「張応善憲兵尋問調書」四三五頁）。

第二次運動でも、同参者たちの多くは金炳河たち四名に参加を強いられた者たちである。金仁根（三九歳）という人物は、金炳河や金利淳などが「殴ロウトスルノテ恐ロシクナリ支上里迄連レ立ツテ来マシタ」と語っている（㉞「證人金仁根憲兵訊問調書」四五三頁）。「此ノ事ニ加リテハ一大事ト思ヒ恐シウアリマスノテ私ハ一歩モ戶外ニ出ス引込シテ居タ」者もいた（㉞「證人劉敬植憲兵訊問調書」四四〇頁）。ただし、腹痛のため同参しなかつた郭在熙（三五歳）という人物によれば、「脅迫シタ所モアレハ脅迫セナイ所モアリ」（㉞「證人郭在熙憲兵訊問調書」四四六頁）、万歳運動への参加意欲がそれなりにあつた者もいた。朴叢英（二三歳）という人物は、同参した理由を金炳河から「君等ハ如何ナルコトカアリテモ余等ガ責任ヲ負フカラ差支ハナイ心配スルナ」と言われたからだと主張するとともに、次のように証言している（㉞「朴叢英憲兵訊問調書」四五〇頁）。

初メ脅迫ヲ受ケ出マシタカ、普通農民テモ大韓独立万歳ヲ呼フカヨイ、又呼ハネハナラスト金利淳等カ申シマスカラ遂其ノ氣ニ乗り皆ト共ニ万歳ヲ呼フト云フ考ヲ起シ其ノ通り致シマシタ丈ノコトテ外ニ何モ目的ハナイノテス。

初めは脅迫されたのだが、金利淳によって農民も「大韓独立万歳」を叫ぶ大義があると説かれると、ついその気になったというのである。参加するのは怖くはあるが、いざというときには責任を取らなくていいし大義もあるから、かえって自ら進んで同参したというわけである。説得によって一瞬にして胸底に秘めていたナショナリズムが呼び起こされた者の心性変化を垣間見ることができる。しかし朴叢英は、最後には自分は「無理ニ引出サレタノテ此ノ様ナ事ニナリマシタカラ許シテ戴キタイノテス」と言って憲兵に赦しを請うている。ナショナリズムは確かに秘めたものとしてありはしても、やはり臆病な心性と隣り合っていた。郭在熙によれば村人たちは、「今後如何ノ罰ガアルタロウカト皆首謀者ヲ恨シテ居」るあり様だという（前掲「證人郭在熙憲兵訊問調書」）。

一方、主謀者たちのナショナリズムには確信的なものがあつた。手下的な存在であつた李呂鍾は最後まで万歳運動への参加を否認した。また、金利淳も一九二三年一〇月まで逃亡を続け、逮捕されて公判に立つと、自分は脅迫されて運動に参加しただけで、「他人ヲ説キ廻ハリ又ハ放火スルトカ云ヒテ脅迫シタルコトハ決シテナシ」と容疑を否認した（㉞「公判始末書」四七四頁）。兩人にはいささか責任の取り方に疑問がつきまとう。しかし、他の四名は万歳運動を責任と確信を持って実行している。金炳河は逃亡しはしたが、逮捕されると、参加強制ならぬ脅迫行為は否定したものの、他はすべて認めるとともに、李呂鍾と金利淳をかばって彼らの加担を否定した（前掲「公判始末書（第二回）」四八〇頁）。また、金応済はいささかの野心はあつたものの、やはりすべてを認め、かねて韓国併合を喜ばず国権の回復を志していたとした（㉞「金応済検事訊問調書」四六二～四六三頁）。

最も注目すべきは、第一次運動を行った李斗栄、特に金赫根のナショナリズムのあり方である。

両人は教養の程度がどの程度なのか分からず、非識字者であった可能性も排除できない。金炳河と金応済に利用されたという側面が否めず、証言から察するに純朴な農民という風がある。しかし、あるいはそれゆえにと言うべきか、その独立精神は愚直ながらも確固としていた。両人とも独立できないのであれば、何回でもどこまでも万歳を叫ぶと言って屈しなかった(㉗「李斗栄憲兵訊問調査書(第二回)」四五二頁、前掲「金赫根憲兵訊問調査書」四三七頁)。また、そのナショナリズムの独自性は、万歳の叫び方に端的に示されていた。金赫根は市場に入った時、最初に「天皇陛下万々歳」、二回目に「朝鮮独立万歳」、三回目に「天道教ノ先生孫秉熙ハ独立万歳ヲ唱ヘテ監獄ニ這入ツテ居ル」と言い、後はただ「独立万歳」とだけ叫んだという(㉗「金赫根憲兵訊問調査書」四五五頁)。彼の独立の論理は以下のようなものであった(㉗「金赫根検事訊問調査書」四六一頁)。

今マテ日本ノ陛下ノ御恩恵ニヨリ朝鮮が大分開ケテ来タテスガ、丁度親ガ子供ヲ成長セシメテ其ノ子ガ独り立ちノ出来ル様ニナツタラ自分ハ隠居シテ世話ヲ讓ル通り、日本陛下下モ朝鮮ヲ元之通り独立セシメテ下サレタ方ガ宜敷イト思ヒ万歳ヲ唱ヘタノテアリマス。

日本と朝鮮の関係を親と子にたとえていることから察せられるように、金赫根はおそらく、朝鮮は日本の保護国であるという認識を持ち続けていたものと思われる。韓国併合の事実を知らなかったわけではないであろうが、内実は保護国と同じだと考えていたのであろう。かつて伊藤博文が、朝鮮が富強となった暁には朝鮮を独立国に戻すと言っていたことは、保護国当時広く知れ渡っており、なお記憶に留められていたであろう。金は、日本と朝鮮の関係を兄弟の自家・分家にもたとえており、日本は朝鮮を独立させ、その上で「日本ガ後見シテ呉レネハ詰リマセヌ」とも述べている。一九一二年一月に孫秉熙は宗令を発し、「吾人は天皇陛下の臣民たり。旧時の虐吏汚政は今日より去り、美制良法が今日より来たれり……」としていた<sup>(30)</sup>が、敬虔な天道教徒の金はこれを記憶していたのかもしれない。本来孫秉熙は親日派であり、完全独立など念頭になく、せいぜいのところ自治を望んでいたに過ぎなかった<sup>(31)</sup>。いずれにせよ金のナショナリズムのあり方は、近代的な知識人が持つ、国際法を前提とした国民国家構想とは違うものである。日本や天皇に対する敵意をほとんど吐露しないばかりか、序列国家観に基づいた朝鮮独立構想であり、天皇はあくまでも請願の対象である。あるいは金は、中国との間にあった伝統的な朝貢関係のあり方を日本に振り向けた議論を展開しようとしていたのかもしれない。天皇は、かつての中国の皇帝と同じ立場にあるという認識である。また、孫秉熙と同じく自治を構想していた可能性もあるが、金赫根に果たして自治国と保護国の区別がついていたのかはなはだ疑問であり、独立するということの理解の仕方は独特で自己解釈的である。天皇への期待は李斗栄にもあり、彼もまた独立万歳を叫べば、それが総督から天皇へ報告され、「自然ニ独立ニナルタロウ」と考えたと言っている(前掲「李斗栄憲兵訊問調査書(第二回)」四五一頁)。ウィルソンやパリ講和会議など、世界世論に対する期待はどこにも語られていない。

(30) 李東初編『天道教会宗令存案』(도서출판 모시는사람들, 二〇〇五年)一九六頁。

(31) 前掲『朝鮮民衆運動の展開』二〇三頁。



そもそも最高主謀者の金炳河は、独立宣言書について動員対象者たちに説明した形跡がない。金応済や金利淳、李呂鍾などの共謀者には伝えたはずだが、伊川万歳運動には、実は独立宣言書はどこにも介在していない。金炳河は、無学者かもしれない李斗榮と金赫根にはパリ講和会議や独立宣言書のことを話しても理解されないといい、話すことがなかったのではないと思われる。他の動員対象者たちの場合は、突然寝込みを襲って動員したものであり、もとより独立宣言書について話す状況にはなかった。金炳河は無職（あるいは農民ともされる）、金応済は常民出身の農民であり、その教養程度はやはり不明だが、前者は兄を巡回教師に持ち、後者は伊川の有力天道教人であるからには、最低限の教育は受けていたものと推察される。彼ら自身も民衆的ではあったが、逆にそうであるがゆえに非識字者が多くいる動員対象の農民にパリ講和会議や独立宣言書のことを説明してもらいがあかないと考えたのであろう。そこには、知識人だけでなくむしろ民衆上層にありがちな愚民観の影もちらつく。それゆえに問答無用の寝込みの動員となったのではないであろうか。

以上のことから分かることは、伊川万歳運動はまことに素朴な民衆運動として展開され、臆病な民衆ナショナリズムを参加強制によって動員しようとしたものであり、独立の論理も民族代表や一般知識人、学生などとはおおよそ違っていたということである。主謀者たちは民衆的に自律的に自分たちのやり方で運動を組織し、また動員された民衆は臆病な心性も手伝って自分たちなりに独立万歳の大義を自覚し、最後まで自覚しない者さえいた。それゆえに、そのナショナリズムも独特のものであった。こうした民衆運動を特異なものとして三・一運動史から排除するわけにはいかない。伊川万歳運動は二次にわたったとはいえ、ごく小さな運動でしかなかったが、三・一運動はこうした民衆の自律的な運動の束として捉える視点が必要であろう。ちなみに伊川邑では、金炳河たちの運動に刺激を受けたのか、六～八日にやはり天道教徒たちによって万歳運動が連日起こされ、七日の運動では多数が参加し、八日の運動ではわずか二〇名の参加ながら一七名が逮捕されている<sup>(32)</sup>。

## おわりに

三・一運動は、朝鮮総督府と日本帝国政府を震撼させるに足る一大民族運動であった。京城だけに止まらず、地方に拡散して多くの民衆が参加していった事実は、もとより利己的で国家観念がない朝鮮民衆にはナショナリズムなど相応しくないと考えていた日本人<sup>(33)</sup>には容易に理解し得ぬことであった。朝鮮民衆がナショナリズムを持つことは、何よりも総督府支配を揺り動かすことになる。武断政治が万全に機能していると思っていた総督府の役人や官憲、軍隊にとってこれほどの衝撃はなかった。それゆえに運動参加民衆への対応は過剰な武力弾圧となって現れたのだが、しかしそれでも朝鮮民衆の決起は執拗に続けられ、その鎮圧には二カ月以上を要した。

この事実は当然に、朝鮮民衆のナショナリズムは近代的といえるほどに強靱なものであったという理解に結びつく。三・一運動に対するこれまでの理解は、民衆がナショナリズムに覚醒し、犠牲的精神によって過酷な異民族支配に抗拒したという認識が一般的であったと言ってよいであろう。

(32) 前掲『朝鮮独立運動Ⅰ』五四五、五五〇、七四〇頁。

(33) 「近代日本における朝鮮蔑視観の形成と朝鮮人の対応」（三宅明正・山田賢編『歴史の中の差別——「三国人」問題とは何か』日本経済評論社、二〇〇一年）参照。

しかし、民衆運動史的に仔細にその運動をなぞっていくと、そう単純ではない民衆の姿がみえてくる。江華万歳運動では確かに二万人にも及ぼうかという民衆が歓喜したが、それはたった一日の光芒でしかなかった。最高指導者の劉鳳鎮にとって、それは意外であったに違いない。しかも逮捕された指導者たちは、その多くが後悔の言葉を吐いているのはナショナリズムの脆弱さを思わせる。また伊川の小さな反乱は、容易に起ち上がらない民衆の姿を彷彿とさせる。それゆえに参加強制という手段が取られるのだが、冒頭で述べたように当時参加強制はごく一般的なことであった。こうしたことからみえてくる民衆のナショナリズムは、実に臆病さを漂わせているものであったということである。やはりそれは、素朴にして始原的、即自的なナショナリズムであったと言うしかない。

しかし三・一運動の高揚は、知識人や学生の近代的なナショナリズムよりも、圧倒的多数のそうした民衆のナショナリズムによってもたらされたものである。数は力なりで、江華万歳運動のように万単位の運動にでもなれば、民衆の熱狂は尋常ではなく、奮い立った。しかも、よき指導者に恵まれたとはいえ、民衆は自律性を持って運動を展開し、暴力や略奪を抑止した。伊川万歳運動でも、動員自体は暴力的であったにせよ、運動自体は非暴力を旨とし、規律維持が図られた。また、脅迫によって万歳を叫んだ者の中にも「独立万歳」の大義を説かれると、むしろ自主的に同参する者も現われた。

多くの民衆は燃えたるナショナルな感情を安定的には持っていなかった。武断政治に対する反感があるにせよ、それに対する異議申し立ては身を犠牲にする覚悟がなければならぬ。ただ彼らは、胸奥にナショナルな感情を秘めていた。確固とした起爆装置さえあれば、それは瞬時に爆発する可能性があった。起爆装置とは、何よりも皇帝毒殺などの流言であり、また徳望ある者や堅固な組織の指導、あるいは強制論理を持った共同体の圧力などである。酒もまた重要であり、それには勇を鼓す即効的な起爆剤としての効能があった。伊川万歳運動の第一次運動では、わずかに五分で取り押さえられたために、五人以外誰も万歳を高唱しなかったが、市場には酒酔いの者が多くいたのだから、今少しの時間があつたらどうなっていたか分からない。独立宣言書は絶対的な起爆剤のようにみえるかもしれないが、しかしそれがたとえあつたにせよ、その内容をどれだけの民衆が理解することができたであろうか。漢字を知らない者にとって「独立」の意味など、具体的に分かりようはずがない。伊川万歳運動での訊問調書には「独立」の意味を問うような質問がほとんど出てこないが、他地域の訊問調書には多く出てくる。それらを見ると、「独立」がどういうことなのか分からないという答えを容易に見つけることができる。独立宣言書の起爆装置としての効能は限定的であったとみるべきであろう。伊川万歳運動では、それが読まれることもそのビラがばらまかれることも全くなかった。

一般的な民衆にあっては、一度万歳運動に参加すれば、後はしないという者がほとんどであったであろう。しかし、そうした運動が二カ月の間、全国で燎原の火のごとく連鎖的に巻き起こった。皮肉にも実は、民衆の始原的ナショナリズムこそが総督府を震撼させたのである。本稿では考察の対象にできなかったが、警官殺害などの対抗暴力ともなればなおさらである。民衆のナショナリズムは臆病で即自的であるが、それこそが三・一運動の主旋律であり、その民衆の自律的な運動こそが、民族代表や民族主義者、学生などの動き以上に三・一運動を尖鋭なものにしたと言える。

事実として三・一運動後、民衆のナショナリズムが一挙に高揚するということは、解放の日まで

ない。しかしそれは、強力な起爆装置や起爆剤があれば、いつまた爆発するか分からないという無気味さを漂わせていた。知識人とは違って近代の網に容易に引っかからない民衆には、迷信や終末宗教、流言飛語など様々な誘惑があった。それゆえ総督府は、それらがいつナショナリズムの爆発を誘発するか予測がつかないという恐れを抱かずにはいられない。文化政治期には終末宗教の体制内化を図るのだが、一九三五年以降再びその取締を強化していくのはそうした恐れに由来するものであったのである<sup>(34)</sup>。

（ちょ・ぎよんだる 千葉大学大学院人文科学研究院教授）

---

(34) 前掲『朝鮮民衆運動の展開』第八～一〇章，参照。